

日本語の特徴の第二は、動詞や形容詞(助動詞にもある)に“活用”といふ変化が有ることである。“行く”といふ言葉を例にして言ふならば、「行か、行き、行く、行け」と四段に変化することである。(このやうに変化する動詞を“四段活用”と言ふ)

“行か”は、「行かう」もしくは「行かない」といふやうに使ふ形なので“未然形(未だ然らず、といふことで「まだ……しない」といふ意味の言葉である)”といふ名が付けられてゐる。前者を“将然形(将に然らんとす、といふことで「これから……しよう」といふ意味の言葉である)」、後者を“否定形”と名づけ、この二つを区別してゐる学者もゐるが、両者は常に同じ形を取り、しかも、“将然”も“否定”も“未然”といふ点では一致してゐるので、“未然形”の名で統一した方が良いと思ふ。

“行き”は、他の活用のある言葉(用言)に接続する場合の形であることから、“連用形”と呼ばれてゐる。この形は、「学校に行き、先生に会ふ」といふやうに、文を中止する時に使はれる形でもあるから、“中止形”といふ別名がある。

また、「行きは電車で、帰りはバス」といふやうに、名詞として使はれ

る時の形でもあるので、“名詞形”といふ名もある。英語の“不定法”や“ing”を着けた形と同じ働きをする形である。

“行く”は、“終止形”と“連体形”といふ名前を有つ。古い言葉では、この二つは異なる形を取るものがあつたから、別々の名前を付けて区別する必要があつたけれども、現代語では、両者が常に例外なく同じ形を取るのので、これを一つにして“終止・連体形”と呼ぶことも出来ると思ふ。

然し、古文を学習することを考へたら、やはり、現代語では全く同じ形であっても、二つに分けて“終止形”“連体形”とした方が良いと思ふ。

“終止形”とは、「文を終止する時の形」といふ意味の言葉通りの形であり、“連体形”とは、「体言(名詞・代名詞の総称で、用言に対する言葉)に連なる時の形」といふ意味の言葉通りの形である。つまり、「行く人」「行く車」といふ時の“行く”である。

この形を使へば、動詞でも形容詞と全く同じやうに名詞に接続して、その名詞を修飾できるのである。英語や中国語では、関係代名詞を使はなければ出来ないことだが、日本語はこの連体形のあるお蔭で、関係代名詞の助けを借りる必要が全く無い。

## 日本語の再発見

“行け”は、「行けば良い」といふやうに仮定する時に使ふ形なので“仮定形”と呼ばれる。然し、「あっちへ行け」といふやうに命令する意味に使はれる時の形の場合は“命令形”と言ふ。

四段活用の動詞では、仮定形と命令形とが全く同じ形になるけれども、“起きる(上一段活用)”“勉強する(サ行変格活用)”“来る(カ行変格活用)”などの動詞の場合には、仮定形が“起きれ(ば)”“勉強すれ(ば)”“来れ(ば)”であるが、命令形が“起きろ”“勉強せよ(勉強しろ)”“来い”となり、仮定形と命令形とが全く異った形を取るのので、二つに分けてゐるのである。